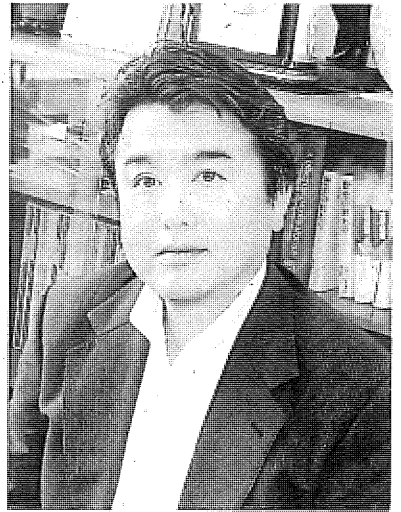


成人の日に寄せて

木村 亮

13日は「成人の日」。学生時代、各地を旅し、自らの可能性を探った京都大学院の木村亮教授にメッセージを寄せてもらった。



きむら・まこと 1960年、京都市出身。85年京都大学院工学研究科土木工学専攻修了。2010年より現職。07年にNPO法人「道普請人」を設立し、途上国で「土のう」による道路補修活動を開始。補修した道路はモザンビーク、南スーダンなど15カ国に及ぶ。

海外への扉を開こう

若者は無限の可能性を
持っている。少しくらい
失敗しても、方向を修正
し、夢に向かって突き進
めばよい。やりたいこと
や興味のあることは、年
齢を重ねるに従って変化
する。ただし、私の頭の
中の変わらぬものは「海
外」という言葉だった。

19歳の夏、1人でカナ
ダ横断の自転車旅行に出
掛けた。初めての海外旅
行は、テントと寝袋と簡
単な調理器具を積んで、
野宿しながらの3カ月間
だった。カナダの緑の芝
生を征えた住宅地の街並
みに驚き、そこで将来、
暮らすことを夢見た。

20歳になると、次はど
の国を自転車で走るかば
かりを考え、アルバイト
に明け暮れた。24歳の時
にはサハラ砂漠を縦断し
た。「どんなものでも食
べられ、誰とでもしゃべ
れて、どこでも寝られる」
をモットーとし、4万キロ
走った。一種の「海外に
行きたい病」が治る

「行きたい病」が治る
る道を何とか通れるよう
にしたい」という思い。
せっかく作った農作物を
市場に運べず、多くの人
が病院や学校に行けなく
なるからだ。
機械を使えば簡単だ
が、お金が十分でない国
では、住民が自力で道を
直せなければ持続しな
い。袋の中に現地土を入
れ、木づちで突き固め
れば驚くほど固くなるの
で、「土のう」を使った
道路補修を教えることに
した。

限らない可能性を信じて



2012年12月、南スーダンの首都ジュバで土のうによる道路補修を手伝う筆者

転機は20年前。国際協力
でケニアの大学で土木工
学を教えることになり、
心優しいケニア人学生た
ちと3カ月を過ごした。
青い空とそこに浮かぶ
雲、緑の木々。赤い大地
に魅せられ、毎年教壇に
立つようになった。

新成人の皆さん、まず
海外に行ってみません
か。自分で世界への扉を
開いて、いろんな人と出
会ってみよう。きっと、
それまでとは全く違う自
分を発見できるはずだか
ら。

そのうち、アフリカの
人々の暮らしを豊かに
し、貧困削減につなげる
ためには何が必要だろう
かと考えるようになって
た。湧き上がってきたの
は「雨期になると、どろ
どろになって通れなくな

自分たちの使う道を自
分たちで直せたことで、
住民の笑顔が広がった。
笑顔と共に日本語の「d
o-inou」が現地の人
々に定着していくのがう
れしくて、今は「途上
国の発展をお手伝いし
たい病」で海外に通って
いる。

(京都大学院工学研
究科教授)